

平成 30 年度学生支援の推進に資する調査研究事業
(JASSO リサーチ)

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究-傾向スコア・マッチングによる検証-

研究経過報告書

研究代表 吳 書雅

東北大学 教育学研究科 博士後期課程

平成 31 年 2 月

は し が き

本報告書は、平成30年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）の採択課題「日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究—傾向スコア・マッチングによる検証—」の研究経過をまとめたものである。

2017年12月に「新しい経済政策パッケージ」が閣議決定された。そのうち、授業料の減免措置の拡充と併せ、年間約800億という給付型奨学金の支給額を大幅に増やすことによって、今後の学生への経済支援に影響を与えることが予想される（高等教育無償化）。同時に、2010年代後半から貸与型奨学金の返済は、マスコミの報道や貸与型奨学金批判に関わる書籍の出版などによって、社会問題化となっている。そのため、従来の貸与型奨学金が、学生支援にどのような影響を与えているかについて、検証する必要性が高まってきている。

こうした背景のもと、本報告書は、その採択課題の一つとして、貸与型奨学金の受給が学生の大学生活にどのような影響を与えているか、傾向スコア・マッチングを用いて、学生の「収入」・「生活費」・「生活時間」の3つ側面から精密な記述を行うものである。本報告書が、関係者各位にご活用いただければ幸いである。また、本年度の研究成果として、全国的学会誌論文2本・本研究科紀要1本が近日掲載される予定である（本文「30年度研究成果」参照）。詳細な分析結果は、これらの論文を参照されたい。

平成31年2月

東北大学教育学研究科博士後期課程2年

呉 書雅

目次

調査研究課題の概要.....	1
第1章 研究の背景・目的および意義	3
1. 研究の背景	3
2. 問題意識	4
3. 本研究の目的.....	5
4. 本研究課題の構成	5
5. 本研究の研究意義	5
第2章 研究の内容および分析手法：学生の収入および支出（生活費）を中心に	9
1. 研究の内容：学生の収入および支出（生活費）を中心に.....	9
2. 分析手法：傾向スコア・マッチング	10
3. 用いる変数	11
第3章 研究の内容および分析手法：学生の生活時間を中心に	13
1. 研究の内容：学生の生活時間を中心に	13
2. 分析手法および用いる変数	14

第4章 受給額による分析・多年度分析（次年度）	17
1. 研究の内容：受給額による分析・多年度分析.....	17
2. 分析手法および用いる変数.....	18
第5章 期待される研究成果	19
30年度研究成果（主な発表論文）	20

調査研究課題の概要

平成 31 年 2 月 28 日現在

助成事業：

平成 30 年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）

研究期間：

平成 30 年度～平成 31 年度

研究課題名（和文）：

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究：傾向スコア・マッチングによる検証

研究課題名（英文）：

An empirical study on the effects of JASSO scholarship loans on the income, living expenses, and living hours of students

研究代表者：

呉 書雅（WU SHUYA）

東北大学・教育学研究科・博士後期課程 2 年

第1章 研究の背景・目的および意義

呉書雅（東北大学大学院）

1. 研究の背景

今日、日本の大学生¹の 37.2%が奨学金を利用している（日本学生支援機構 2018a）。そのうちの 40.2%が第一種奨学金の無利息貸与型奨学金を、59.8%が「きぼう 21 プラン奨学金」（第二種奨学金）と呼ばれる有利息貸与型奨学金を利用している。

表1 貸与型奨学金奨学生数

単位:人				
奨学金種類	奨学生数	割合	全学生数	割合
第一種奨学金	519,923	40.2%	3,477,400	15.0%
第二種奨学金	772,374	59.8%		22.2%
合計	1,292,297	100.0%		37.2%

出典：日本学生支援機構, 2018a, 「平成 29 年度貸与実績」 (https://www.jasso.go.jp/shogakukin/chihoshien/sosei/zisseki/_icsFiles/afieldfile/2018/08/24/h29taiyozisseki_todoufukubetsu_1.pdf, 2019 年 2 月確認) より, 筆者作成。

「きぼう 21 プラン奨学金」（第二種奨学金）は、平成 11 年 4 月 1 日より本格始動した事業である。具体的には、「きぼう 21 プラン奨学金」は、従前の第二種奨学金に代わる新しい利息付きの仕組み、貸与人員の大幅増や採用基準の緩和、貸与月額を選択性の導入などの改善となっている（日本学生支援機構ホームページより）。

こうした貸与人数の拡大を図る奨学金政策改革の実施と軌を一にして、長期の不況や格差の拡大、大学授業料が高騰した結果、貸与型奨学金の奨学生数は増加しつつある（日本学生支援機構 2018b）。

¹ ここでは、大学・短期大学・大学院・高等専門学校および専修学校が含まれている。また、用いたデータは平成 29 年度のものである。

このことについては、高等教育進学のマス段階からユニバーサル段階への移行過程の中で、高等教育第二種奨学金が、4年制大学への進学率向上に貢献しているとして、肯定的な論調で評価されており（阿部 2015，島 2015，白川 2018），現代日本において奨学金の重要度が高くなっていることの一つの証左となっている。

その一方で、2000年代の後半に入ると、奨学金返済の滞納の増加が行政課題として取り上げられたことを受けて、日本学生支援機構は回収強化のため制度変更を行ったが、これについては世間からの逆風が生じている。2000年代から「奨学金予算削減へ 回収不能 2000億円／遊興費に転用増え」（産業新聞 2007）といった「奨学金は浪費されている」報道が日の目を見ることになり、さらに2010年代からは『奨学金が日本を滅ぼす』（大内2017）・『奨学金地獄』（岩重2017）・『ブラック奨学金』（今野 2017）等の書籍が出版されたり、朝日新聞による「奨学金破産」²というトピックに関する一連の報道がなされた。こうした経緯を踏まえて、白川（2018）は、奨学金返済が社会問題となっていることに警鐘を鳴らしている。

2. 問題意識

奨学金返済が社会問題化する中で、未返済と無駄遣いがセットで報じられたことで、奨学金についてのパブリックイメージは著しく悪化している。しかし、奨学金をめぐる言説は、一部の事例をもとに奨学金政策全体に対する論難を繰り返すにとどまっていたり、奨学金を必要とする者が、偏ったイメージに基づいて奨学金受給を忌避することにも繋がりがねない。この場合、奨学金によって拓かれるはずだった教育機会が逸失してしまうこととなる。

こうしたミスリードを避けるために今の私たちに必要なことは、未返済事例に定性的な議論と、奨学金の使い道や学生生活に関する影響という政策効果の実態把握の議論を切り分けて、後者についての実証分析を着実に実施し、奨学金政策に関する信頼できるエビデンスを確立していくことではないだろうか。

² 具体例としては、「娘が自己破産を」 奨学金 400万円，定年の父が返還」（朝日新聞 2018年 2月 13日），「月 3.9万円の奨学金返済，48歳まで… 子ども諦めた」（朝日新聞 2018年 4月 1日）があった。

3. 本研究の目的

そこで、本研究は、奨学金受給者と非受給者の収入・支出・生活時間を比較することで、奨学金受給によって学生の大学生活がどのように変化するのか、実証的に明らかにすることを目的とする。

分析に際しては、傾向スコアマッチングという統計手法を採用し、収入・支出や生活時間などに対する奨学金の影響と奨学金以外の諸条件の影響を峻別したうえで、奨学金が学生の収入・支出・生活時間に与える影響を明らかにする。これによって奨学金が大学生活の支出に与える影響を精密に算出することができる。算出結果は、奨学金政策の有効性を評価するための最も重要なエビデンスの一つとなる。

4. 本研究課題の構成

本調査研究課題の構成は下記の通りである。なお、最終年度（31年度）の研究結果報告書はこれに基づき執筆する予定である。

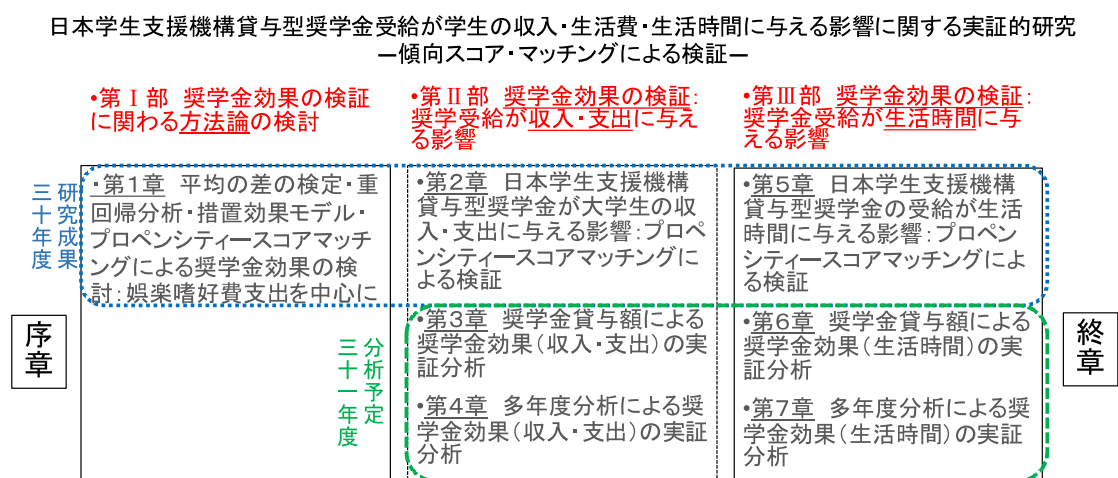


図1 本研究課題の構成

5. 本研究の研究意義（研究計画書より再掲）

《奨学金の使い道の解明およびその影響》

前節の通りに、本研究では、学生の収入と支出という側面から、奨学金の使い道というブラックボックスを解明する。その上で、奨学金受給によって、学生の生活時間（授業関連学習時間、授業外学習時間等）にどのような影響を与えているのか

を明らかにする。これによって、貸与型奨学金制度を適切に評価すること、この制度を有効に機能させていくためのヒントを得ることが可能となる。

《奨学金有効活用のノウハウ》

傾向スコアマッチングを用いた分析によって、学生個々人のレベルで、奨学金が大学生活にどの程度影響するかを示すデータを得ることができる。さらに、奨学金受給者の属性（奨学金の種類・奨学金の受給額）によって奨学生受給者を取り上げて、非受給者と比較すると、どのような学生がどのような条件のもとにたつとき、奨学金が有効に活用されるのかが明らかになる。この知見は、奨学金を有効に活用するためのノウハウとしての有意義である。

奨学金活用のノウハウは、進学予定者やその保護者にとって重要な情報である。また、奨学金活用のノウハウが明らかになれば、たとえば大学が主体となって、奨学金受給者を対象に奨学金活用に関するレクチャーを実施する等、奨学金政策の有効性を高めるための様々な事業展開の可能性が拓ける。

《傾向スコア・マッチングによる精密な分析》

比較に際しては、傾向スコア・マッチングという統計手法を採用する。傾向スコア・マッチングを用いた分析とは、簡単に言えば、奨学金受給者グループ・非受給者グループの間に生じる、奨学金以外の条件（例えば学力や家計）の偏りを排除して、両グループの支出行動を比較するものである。これにより保護者の収入や当人の学力といった奨学金以外の条件による影響を排除し、奨学金が大学生活に与える影響だけを精密に算出することができる。算出結果は、奨学金政策の有効性を評価するための最も重要なエビデンスの一つとなる。

また、先行研究と比較するため、先行研究の最新年度 2010 年のデータを用いて、傾向スコア・マッチングを中心に、貸与型奨学金が学生の生活に与える影響を明らかにする。一方、方法論を検討するため、先行研究で用いた複数の分析手法を併用した分析によって、貸与型奨学金が学生の生活に与える影響³を検証する。用いる統計手法は平均の比較、重回帰分析・措置効果モデル・傾向スコア・マッチングである。

³ 本研究課題では、先行研究で主要な論点となっている娯楽嗜好費を取り上げて分析を行う（研究成果③参照）。

さらに、分析結果の安定性を高めるため、本研究課題では、複数年度のデータを用いた分析を実施し、より堅固なエビデンスを構築する。

【参考文献】

- 朝日新聞, 2018a, 「「娘が自己破産を」 奨学金 400 万円, 定年の父が返還」
(http://www.asahi.com/articles/ASL2F5FF8L2FUUPI009.html?iref=pc_ss_date, 2019 年 2 月確認)
- 朝日新聞, 2018b, 「月 3.9 万円の奨学金返済, 48 歳まで… 子ども諦めた」
(https://www.asahi.com/articles/ASL3Y5DCFL3YUUPI004.html?iref=pc_ss_date, 2019 年 2 月確認)
- 阿部廉, 2015, 「奨学金利用者の卒業後の社会・経済的状況に関する分析—大学経営における奨学金管理業務の担う役割の展望—」『教育費負担と学生に対する経済的支援のあり方に関する実証研究』大総センターものぐら No. 13 : 223-242.
- 今野晴貴, 2017, 『ブラック奨学金』文藝春秋.
- 岩重佳治, 2017, 『「奨学金」地獄』小学館.
- 大内裕和, 2015, 「日本の奨学金問題」『教育社会学研究』96 : 69-86.
- 大内裕和, 2017, 『奨学金が日本を滅ぼす』朝日新聞出版.
- 島一則, 2015, 「日本学生支援機構奨学金返還における延滞発生メカニズム—大学に注目して—」『教育費負担と学生に対する経済的支援のあり方に関する実証研究』: 211-222.
- 白川優治, 2018, 「奨学金制度の歴史的変遷からみた給付型奨学金制度の制度的意義」『日本労働研究雑誌』694 : 16-28.
- 日本学生支援機構「日本育英会の沿革」(<https://www.jasso.go.jp/about/organization/history/ikuei.html>, 2019 年 2 月確認)
- 日本学生支援機構, 2018a, 「平成 29 年度貸与実績」(https://www.jasso.go.jp/shogakukin/chihooshien/sosei/zisseki/_icsFiles/afieldfile/2018/08/24/h29taiyozisseki_todoufukenbetsu_1.pdf, 2019 年 2 月確認)
- 日本学生支援機構, 2018b, 「日本学生支援機構について」(https://www.jasso.go.jp/about/ir/minkari/_icsFiles/afieldfile/2018/03/20/30minkari_ir.pdf, 2019 年 2 月確認)
- 産経新聞, 2007, 「奨学金予算削減へ 回収不能 2000 億円／遊興費に転用増え…」『産経新聞』2007. 9. 17.

第2章 研究の内容および分析手法：学生の収入および支出（生活費）を中心に

呉書雅（東北大学大学院）

1. 研究の内容：学生の収入および支出（生活費）を中心に

本章では、学生の収入および支出の面において、貸与型奨学金の受給が大学生の生活にどのような影響を与えるか検証する。また、本課題研究にある本章の位置づけは、図2の通りである。

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究
—傾向スコア・マッチングによる検証—

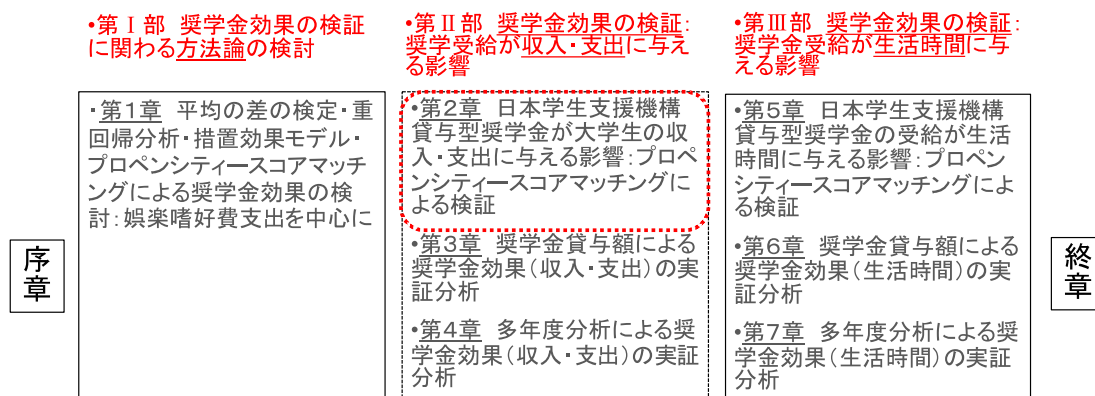


図2 本章の位置づけ

奨学金受給の効果に関わる研究については、2000年以降のアメリカの実証研究（給付型奨学金を中心に）を整理した小林（2018）によるレビューが挙げられる。小林（2018）では、1980年代以降計量経済学の統計手法の発展につれて、計量経済学の統計手法（差の差分等）を用いた研究が現れてきたことや、これらの研究の検証結果が、必ずしも一致していないことが指摘されている。

一方、日本国内の実証研究でも、濱中他（2016）、呉・島・西村（2019a・掲載予定）は、奨学金効果（収入や支出などの経済面への効果）の先行研究がされている。

濱中他（2016）によれば、「どのように奨学金を有効活用しているか」（藤森 2015）といった問いを検証した研究は、研究によって結論が一致していないし、奨学金の有効性に対しても評価が分かれている。具体的には、伊藤・鈴木（2003）では、奨学金が海外旅行費のような娯楽費に使われていることを指摘しているが、藤森（2008）では、奨学金は生活費と学費の補填として活用されていると言及している。

こうした見解の不一致を踏まえて、呉・島・西村（2019a・掲載予定）では、従来の先行研究で用いた統計分析手法の問題点について検討している。具体的には、最新の分析手法である措置効果モデルは、第一段階目の奨学金受給関数と第二段階目の消費関数との独立変数の多くが重複すると、多重共線性が生じ、分析結果が不安定となる可能性があることが知られているが、この点について、本研究課題の研究成果の一つとした呉（2018）によれば、可能な限りに先行研究との同様な変数・データセットを用いて分析を行った結果、先述した多重共線性が生じた可能性があることが判明した。

そこで本研究では、前述した多重共線性問題を克服できる傾向スコアマッチングを採用し、さらに先行研究と比較できる 2010 年度『学生生活調査』のデータを用いて、奨学金受給が大学生の収入・支出（生活費）に与える影響を全般的に明らかにする。さらに、第一種奨学金と第二種奨学金の受給基準の差異が存在し、これによって奨学金の効果が異なると予想されるため、本研究ではさらに第一種奨学金受給者に限定した奨学金受給の効果を検証する。

2. 分析手法：傾向スコア・マッチング

傾向スコアマッチングとは、学生の属性などの独立変数を傾向スコアという1つの尺度に次元縮約し、傾向スコアが同値あるいは近似値の受給者（処置群）と非受給者（対照群）をマッチングして、ペアとなった者の収入、支出、生活時間の差（平均処置効果）を求めるという手法である。

傾向スコアマッチングのメリットの一つは、セルフ・セレクション⁴を考慮できる点である。すなわち、そもそも奨学金に申請しようとする者としらないものでは、例えば消費性向のように「奨学金そのものではないが、奨学金受給に付随し、かつ、

⁴セルフ・セレクションとは、自らの意思によって行動を選択すること、またはその選択結果、行動を取った人と取らない人との間では、特性の差が生じる（末石 2015）。

収入や支出，生活時間に影響を与えうる諸要因」が存在する。こうした要因を統計的な操作によってコントロールし，奨学金以外の要因をイコールフットイングした上で，収入，支出，生活時間を比較するのが傾向スコア⁵である。

3. 用いる変数

傾向スコアマッチングは二段階推定法である。第一段階では，ロジスティック回帰分析（またはプロビット回帰分析）を用いて，傾向スコアを算出する（ここでは奨学金受給の確率を指す）。そして，第二段階では，同値あるいは近似値の傾向スコアを有する処置群（奨学金受給者）と対照群（奨学金非受給者）をマッチングして，両者の収入・支出額を比較する。

第一段階

奨学金受給の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行う。独立変数の選択については，先行研究を参照しながら，下記の変数を扱う。

- ・親に関する変数：家庭の年間所得総額・家計支持者世帯
- ・学生本人に関する変数：性別・学年・住居形態・大学所在地・学科・高等教育機関に在学する兄弟姉妹数

第二段階

同値あるいは近似値の傾向スコアを持つ奨学金受給者と非受給者の収入と支出を比較する。比較する費目は，下記の通りにある。

- ・収入：①収入総額・②家庭からの給付・③奨学金の合計・④JASSO 奨学金・⑤アルバイト・⑥定職収入＋その他
- ・支出：①支出総額（貯金を含む）・②支出総額（貯金を含まず）・③授業料＋学納金・④修学費・⑤課外活動費・⑥通学費・⑦食費・⑧住居光熱費・⑨衛生保健費・⑩娯楽嗜好費・⑪その他の日常費・⑫貯金繰越

⁵ 詳細については，本研究課題の研究成果とした呉・島・西村（2019a・掲載予定）と呉・島・西村（2019b・掲載予定）を参照されたい。

【参考文献】

- Austin, Peter C., 2011, “An Introduction to Propensity Score Methods for Reducing the Effects of Confounding in Observational Studies,” *Multivariate behavioral research*, 46(3): 399-424.
- Drake, Christiana, 1993, “Effects of Misspecification of the Propensity Score on Estimators of Treatment Effect.” *Biometrics*, 49(4): 1231-1236.
- 伊藤由樹子・鈴木亘, 2003, 「奨学金は有効に使われているか」『家計経済研究』58:86-96.
- 小林雅之, 2009, 『大学進学の世界均等化政策の検証』東京大学出版会: 1-263.
- 小林雅之, 2018, 「アメリカにおける学生への経済支援の効果の実証研究の動向」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』4: 39-51.
- 呉書雅, 2018, 「平均の差の検定・重回帰分析・措置効果モデル・プロペンシティースコアマッチングによる奨学金効果の検討——娯楽嗜好費支出を中心に」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』67(1): 93-107.
- 呉書雅・島一則・西村君平, 2019a (掲載予定), 「日本学生支援機構貸与型奨学金が大学生の収入・支出に与える影響——プロペンシティースコアマッチングによる検証」『生活経済学研究』49.
- 呉書雅・島一則・西村君平, 2019b (掲載予定), 「日本学生支援機構貸与型奨学金の受給が生活時間に与える影響——傾向スコアマッチングによる検証」『高等教育研究』22.
- Guo Shenyang and Fraser Mark W., 2014, *Propensity Score Analysis: Statistical Methods and Applications*, CA: Sage Publications: 1-394.
- 末石直也, 2015, 「サンプルセレクションとセルフセレクション」『日本労働研究雑誌』657: 16-17.
- 濱中義隆・佐藤香・白川優治・島一則, 2016, 「高等教育研究と政策—奨学金研究を題材として」『教育社会学研究』99: 71-93.
- 藤森宏明, 2008, 「奨学金が学生生活に与える影響」『奨学金の社会・経済効果に関する実証研究』: 49-66.
- 藤森宏明, 2015, 「学生生活費に及ぼす奨学金の効果についての再分析」東京大学大学総合教育研究センター編『教育費負担と学生に対する経済的支援のあり方に関する実証研究』大総センターものぐらふNo. 13: 87-127.
- 星野崇宏, 2015, 『調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合』岩波書店.

第3章 研究の内容および分析手法：学生の生活時間を中心に

呉書雅（東北大学大学院）

1. 研究の内容：学生の生活時間を中心に

本章の目的は、奨学金受給が大学生の生活時間にどのような影響を与えているかを明らかにすることにある（図3）。また、低偏差値ランクの大学に所属する学生においても、同様に奨学金の効果が見られるかを検討するため、本章では偏差値45未満の学生に限定して、奨学金の効果（生活時間）を検証する。

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究
—傾向スコア・マッチングによる検証—

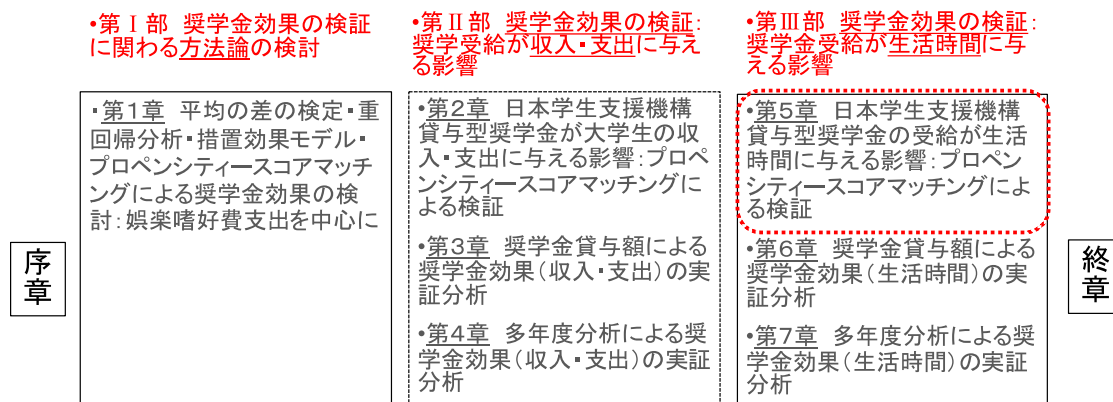


図3 本章の位置付け

関連する先行研究については、本事業研究成果の一つである呉・島・西村（2019b）にて詳細に論じられている。そこでは、データの制限のためか、生活時間の検証はその端緒についたばかりであり、十分な検討はなされていないことが明らかになっている。また、生活時間に関する研究でも、前章で指摘した通り、分析手法に関する問題が残されていることも指摘されている。

2. 分析手法および用いる変数

ここでは、前章と同様に平成 22 年度『学生生活調査』を用い、傾向スコアマッチング分析を行う。

また、偏差値については、代々木ゼミナール（2010）の『2011 年度大学入試難易ランキング』に掲載されている大学学部別の偏差値に基づく、偏差値変数を作成した。他方、「偏差値 45 未満」⁶の私立大学学部を低偏差値ランクとした基準は、島・原田・西村・呉・真鍋（2018）、島（2018）等を参考したものである。

第一段階

奨学金受給の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を行う。用いる変数は下記の通りである。

- ・親に関する変数：家庭の年間所得総額・家計支持者世帯
- ・学生本人に関する変数：性別・学年・住居形態・大学所在地・学科・高等教育機関に在学する兄弟姉妹数

第二段階

同値あるいは近似値の傾向スコアを持つ奨学金受給者と非受給者の生活時間を比較する。生活時間に関わる項目は、下記の通りにある。

- ・生活時間：①生活時間合計・②大学の授業・③授業関連の学習・④授業外の学習・⑤サークル活動・⑥アルバイト等の就労活動・⑦娯楽・交友

【参考文献】

Austin, Peter C., 2011, “An Introduction to Propensity Score Methods for Reducing the Effects of Confounding in Observational Studies,” *Multivariate behavioral research*, 46(3): 399-424.

呉書雅・島一則・西村君平，2019a（掲載予定），「日本学生支援機構貸与型奨学金が大学生の収入・支出に与える影響——プロペンシティブスコアマッチングによる検証」『生活経済学研究』49.

⁶ なお、偏差値 40 未満に限定したモデルを試行した結果、処置群（奨学金受給者）のサンプル数が少なすぎのため、マッチング後のバランス評価が一定の水準に達していないため、基準を偏差値 45 未満と設定した。

- 呉書雅・島一則・西村君平, 2019b (掲載予定), 「日本学生支援機構貸与型奨学金の受給が生活時間に与える影響——傾向スコアマッチングによる検証」『高等教育研究』22.
- Guo Shenyang and Fraser Mark W., 2014, *Propensity Score Analysis: Statistical Methods and Applications*, CA: Sage Publications: 1-394.
- 島一則・原田健太郎・西村君平・呉書雅・真鍋亮, 2018, 「地方私立大学における大学教育の経済的投資効果の検証—偏差値 45 未満の大学に着目して—」『私立大学の課題と展望—私学財政・国際交流・認証評価を中心に— (私学高等教育研究叢書)』私学高等教育研究所: 29-61.
- 島一則, 2018, 「大学教育の効果—平均と分散: 低偏差値ランク私立大学に着目して」『季刊 個人金融』2018 年秋: 22-32.
- 星野崇宏, 2015, 『調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合』岩波書店.
- 代々木ゼミナール, 2010, 『2011 大学入試難易ランキング』代々木ライブラリー.

第4章 受給額による分析・多年度分析（次年度）

呉書雅（東北大学大学院）

1. 研究の内容：受給額による分析・多年度分析

本章では、奨学生の受給額（高額・少額）が大学の収入・支出および生活時間に及ぼす影響について考察していく。受給額による奨学金を検証する必要となる理由は、奨学生が得られた奨学金の金額によって奨学金の効果（収入・支出・生活時間）が異なると予想されるからである。

また、より信頼できる分析結果を実現するため、同分析枠組み（収入・支出・生活時間）をそれぞれ年度ごとに、複数年度にわたる分析を行う。分析予定年度は、平成16年度・18年度・20年度・24年度・26年度・28年度である。

これらは次年度（31年度）に実施する予定である（図4）。

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究
—傾向スコア・マッチングによる検証—

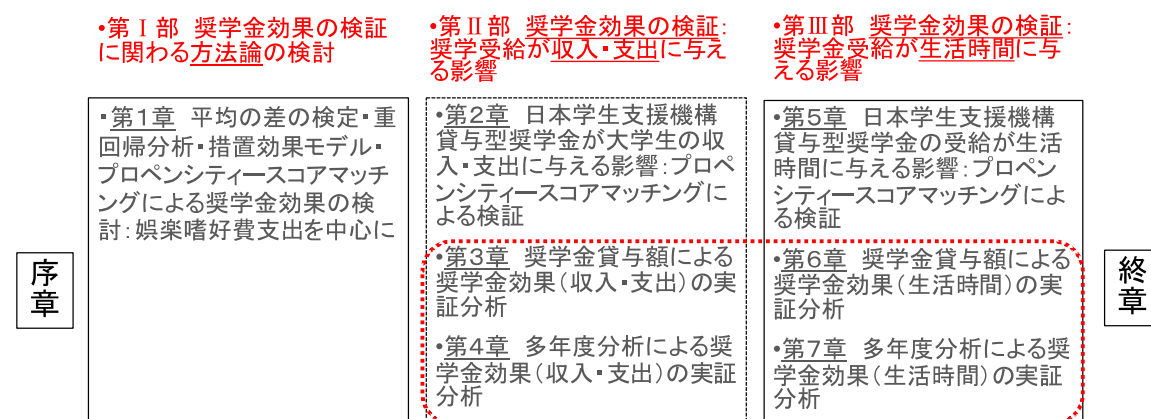


図4 本章の位置付け

2. 分析手法および用いる変数

受給額による奨学金の効果（収入・支出および生活時間）について、分析手法は、前章と同様に傾向スコアマッチングを用いて分析を行う。また、用いる変数は、第2章と第3章で使われた変数を用いる。

多年度分析では、平成22年度のデータを用いた奨学金効果の分析結果を踏まえて、年度ごとに繰り返し行い、妥当性の高いモデルを構築する。その上で、長期的な変化を含めて、奨学金政策の総合的な評価について考察する。

第5章 期待される研究成果

呉書雅（東北大学大学院）

①方法論の確立

本研究により、先行研究で残った統計手法の問題点を克服し、先端的な統計手法である傾向スコア・マッチングを用いて奨学金効果を検証する手続きを示す。この手続きは、奨学金の政策評価のレパトリリーの一つとして、共有しうるものである。

②奨学金が学生の経済生活に与える影響の解明

学生が如何に奨学金を活用しているのか、各収入・支出項目は如何に奨学金の運用に影響を与えるのかを明らかにすることで、奨学金受給が学生の経済生活に与える影響に関する知見を得る。経済的支援に関わる奨学金政策の有効性に直結した議論を展開するためのエビデンスを得る。

③奨学金が学習時間やバイト時間等の大学での学びそのものに与える影響の解明

奨学金受給が学生の授業関連・授業外学習・サークル活動等に及ぼす影響を解明できる。これによって、学生への経済的支援のみならず、貸与型奨学金受給が学生の大学生活への支援の効果も明らかにすることが可能となる。

④低偏差値大学において奨学金が学生生活に与える影響の解明

奨学金が低偏差ランクの学生の生活時間に及ぼす影響を明らかにすることで、経済的な理由で進学困難、かつ低偏差ランクの大学にしか進学できない学生に対する奨学金支給の正当性を確認する。このことは、特に低所得層の学生はローン回避傾向があるため進学を忌避することに鑑みれば、重要な政策的意義を持っている。

⑤奨学金政策に対する通俗的言説の是正

実証的裏付けに基づいた公式発表等を可能とする基礎データを構築する。これにより新聞報道等によるセンセーショナルな言説に対する反証を行う。

30 年度研究成果（主な発表論文）

以下は、初年度に本研究による発表文献のリストである。

【雑誌論文】

- ① 呉書雅・島一則・西村君平，2019a（掲載予定），「日本学生支援機構貸与型奨学金が大学生の収入・支出に与える影響——プロペンシティブスコアマッチングによる検証」『生活経済学研究』49. （査読有）
- ② 呉書雅・島一則・西村君平，2019b（掲載予定），「日本学生支援機構貸与型奨学金の受給が生活時間に与える影響——傾向スコアマッチングによる検証」『高等教育研究』22. （査読有）
- ③ 呉書雅，2018.12，「平均の差の検定・重回帰分析・措置効果モデル・プロペンシティブスコアマッチングによる奨学金効果の検討——娯楽嗜好費支出を中心に」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』67(1)：93-107.

平成 30 年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）
研究経過報告書

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間
に与える影響に関する実証的研究：傾向スコア・マッチングによる
検証

発行 平成 31 年 2 月

研究代表 呉 書雅（東北大学 教育学研究科 博士後期課程）

980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1

平成 30 年度学生支援の推進に資する調査研究事業

(JASSO リサーチ)

日本学生支援機構貸与型奨学金受給が学生の収入・生活費・生活時間に与える影響に関する実証的研究：傾向スコア・マッチングによる検証

研究経過報告書